大地

第　59　号
2019.5.20.発行

浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

夫まさばまさばと眺む庭躑躅
若葉して一目千本山毛欅林
三筵のぜんまい干して留守の家
緑蔭を抜け緑蔭を繋ぐ道
草取り女休み休みに鎌を研ぐ
城址また司令部跡や夏木立

句集『朝の光』より
平成六～七年

アナログ量とデジタル値

山崎　隆史

世の中にデジタル製品があふれ、テレビもデジタル放送になって久しいですが、「デジタル」の正しい意味はあまり知られていません。「デジタル＝コンピュータ」と誤解されがちです。

やれ自分はアナログ人間だからコンピュータは苦手だとか、デジタル世代は人情が無いとか、勘違いしている日本人のなんと多いことか。

簡単にいうと、アナログというのは何らかの量を「量」のまま扱うやり方で、デジタルというのは量を「値」にして扱うやり方です。釣った魚の大きさを伝える時、両手を広げて「こんな大きな魚を釣った」と言うのがアナログ、大きさを測っておいて「〇〇センチの魚を釣った」というのがデジタルです。

コンピュータにはデジタルの方が向いており、デジタル処理が使われるので、コンピュータ＝デジタルという誤解を生むのです。

別の見方をすると、アナログは曖昧な「量」や「映像」や「音」をそのまま扱うやり方で、デジタルはそれらを何らかの「意味」に変えて扱うやり方とも言えます。

考えてみると、ほとんどの人間は、訓練なしでは目で見たままを絵にする事はできません。絵の描き方を学ぶ人は、立体を平面に表す手法だとか、物体に光が当たった時に陰影や明暗がどのようになるか、など、絵の描き方の技術を学びます。普通の人間は、見たものを映像そのままではなく、物体の配置とか色や質感の印象などで覚えるのです。音も、聞いたままではなく、人の声、動物の鳴き声、楽器の音色などに分けて聞くのです。職人さんは手指の感覚で物づくりをしたりしますが、その感覚を人に伝える事は難しいものです。実は人間は「アナログ」より「デジタル」的なやり方の方になじみがあるのかもしれません。

「こぉ～んな大きな魚」と示す両手はだんだん広がるものです。アナログは伝わる時に誤りが含まれやすく、デジタルの方が誤りが含まれにくいのです。しかし具体的な数字であっても、しゃべっているうちにだんだん大きな数字になるのもよくある話です。手帳か何かにメモしておけば間違いないでしょう。

「デジタル」というものに「無味乾燥」とか「人間味を失わせる」といった悪いイメージを持っている人がいますが、メモするのを「人間味がない」などと思う人はいません。自分になじみがなかったり、よく知らない物に対して悪いイメージを持つという事なのではないでしょうか。

今日、という理由

山﨑直子

からりとした暑さの五月も過ぎ、そろそろ長期予報では梅雨の話題がニュースを賑わすようになってきました。今年の夏もまた猛暑、と覚悟を決めるのが良いようですが、お義母さんと並んで画面を見ながら「いやですねえ」「困るわねえ…」と呟いてしまうのも正直なところ。昨年相次いだ熱中症のニュースですが、今から油断せず気を付けていきたいところです

暑くなれば涼しい所に行きたいし、寒くなれば温暖な所に行きたい、と思うのは多分に人の性でしょうが、どこに住むかを決めるのは例えばどんなことが理由になるのでしょう。アクセスが良かったり、買い物に便利だったり、家賃が安かったり、代々馴染んだ土地だったり、イメージが良かったり憧れがあったり、人によって理由は様々でしょう。では、突然それらを覆すものが現れたとしたら、人はどう思うのでしょう。

少し前になりますが 都心の所謂「一等地」に区立の子育て支援を中心とした施設を作る、という話が持ち上がり、区の担当者の方が計画について説明をする集会の様子が放映されていました。出席者は反対の立場を取っている方が多いのか、放映される様子を見る限りは和やかな雰囲気という訳にはいかなかったようです。特に話題に上がっていたのが、施設内に作られる予定の、近親者の家庭内暴力から配偶者や子供たちを保護するためのシェルターの存在で、反対を強く表明していた出席者によると、「この付近は習い事や塾に通っている子も多く、学習のレベルも高いし持ち物も違う。保護される家庭の子がこの辺りの学校に通うようになっても可哀想な思いをする」とのことでした。

…はて？

そもそも、シェルターに保護されている間というのは外出をすることはないそうなので、この方の発言は全くの的外れなのですが、なんだか凄いことを堂々と言う人が「一等地」にはいるものだなあと驚いたのが正直なところです。この人の〈友達〉の基準が同じ物を持っている人のことだとしても、子ども達の世界は本来そこまで偏狭ではないし、彼らの世界にその価値観が蔓延しているとするならそれは周りの大人の責任だし、子ども と呼ばれるうちにこそ学ぶべき違いや、触れておくべきことも世界にはきっと沢山あるはず、と考えさせられる話でした。嫌な思いをすることもあるだろうけれどその気持ちに耳を傾けてくれる大人が身近にあるなら、きっとそれが何よりありがたいこと。そして今日の自分がどうしてここにあるのか、どれほどのご縁の下に今こうしているのかを知る機会があったなら「持つ人」「持たない人」という価値観からは少なくとも自由でいられるだろうし、私もそうありたいなあと思った平成の終わりでありました。

※その後放映された地元住民への街頭アンケートでは、8割の方が建設に賛成とのこと。なんだかホッとします…。

一枚の紙と雲

山崎隆昌

以前読んだ文のなかに、ヴェトナム出身の禅僧ティク・ナット・ハン著『仏の教え ビーング ピース』（中公文庫）からの言葉が引用されていました。それは次の言葉です。

もし、あなたが詩人であるならば、この一枚の紙の中に雲が浮かんでいることをはっきりと見るでしょう。雲なしには、水がありません。水なしには、樹が育ちません。樹なしには、紙はできません。ですから、この一枚の紙の中に雲があります。この一ページの紙の存在は、雲の存在に依存しています。紙と雲はきわめて近いものです。この小さな一枚の紙の存在が、宇宙全体の存在を表しています。

言うまでもなく、雨雲が地上に雨を降らせ、雨は地上に水を届け、地上の植物は水により育ち、そして紙は樹木を原料として作られます。だから雲なくして紙はなく、紙と雲は深く結ばれた不二の関係にあるというのです。何か落語の「風が吹けば桶屋がもうかる」の論法に似ておりますが。

ティク・ナット・ハンはさらに論を進めて「小さな一枚の紙の存在が、宇宙全体の存在を表している」と述べます。

工場や作業場で紙を作る人、樹木を育てる人、伐採する人、河川を護る人、製紙機械を作る人、電力を送る人、そしてその家族等々無限に拡がる人の関係が見えてきます。さらに太陽、空気、大地、風等々の自然との関係このように見ると、小さな一枚の紙のなかに宇宙全体が存在していることが頷けます。

小さな一枚の紙のなかに宇宙全体が存在しているのですから、いわんや一人の人間の存在のなかに、宇宙全体が存在していることは当然のことと言えるのでしょう。

私が、今一人の人間として生きていることは、どれほど多くのつながり（縁＝えにし）のなかにあることか。それは無量、無限の広がりです。

かく言う私は、日常の生活の中で「自らの今の存在が、無限の宇宙空間と過去・未来・現在の時のつながりのなかに生かされていること」について素直に頷くことがなかなかできません。

そこには、他者との比較に悩み、世間の常識やうわさに汲々として振り回されている私がおり、そして自分の欲望やとらわれ、怒りや妬み、楽しみや哀しみ等の感情を持て余し、その時その時の都合により他とのつながりを見ている姿があります。

一方で、多くの人々に助けられ、お蔭様の中で生かされているなあと思う自分があります。家族、親しい友、そして亡き父母、伯父や伯母など

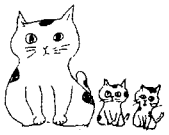
田植えの終えた瑞々しい一面に広がる水田を見ていると、自分の心が洗われるような気がします。

ティク・ナット・ハンは「もし、あなたが詩人であるならば、一枚の紙の中に雲を見る」と述べていますが、「詩人である」ことはどのような意味なのでしょうか。

詩人の宗左近は『詩のささげもの』で、詩について、次のように表しています

見えないもの　それを見たい。
聞えないもの　それを聞きたい。
触れないもの　それを触りたい。
嗅げないもの　それを嗅ぎたい。
味わえないもの　それを味わいたい。
感じられないもの　それを感じたい。
　そして
無いもの　それをあらしめたい。

私は詩人ではありませんが、出来うる限り一枚の紙の中に雲を見たいと思います。



ワン公物語⑲

―華のつぶやき―

山崎　華（慎子代筆）

私は華。パグ犬の雌。六月には十二才である。言いたかないけど、我ながら年を重ねたなと思う。いろんなことが面倒になってきてしまってね。でも、寄る年波に勝てないのは母さんも私も同じなのだ。

小さい頃よく面倒を見てくれたケイ子さんが近頃の私を見て、まるで別人のようだと笑う。軽やかに（バンビみたいに！）とびまわり、戸をサッと開けて脱走してしまう私に、いつもハラハラさせられていたケイ子さんにとって、それは当然の感慨かも知れない。一日の大半をおとなしく眠っている私を見るにつけ、本当にアノ華ちゃんなの？ってかなり真剣に疑っているのが、私からすれば面白いのだがそれも　マ・イイか！

母さんが気まぐれに散歩に行こうと言う。片付けもひと通り済みお天気も良いので、ふと思いついたという体である。アレ、今日はもう父さんと行って来たのになと思いつつ、家の中で退屈しているよりは、母さんと遊んであげようと尻尾をふりふりついて行く。

このところのお天気で、藤も咲き花水木もほころび、満天星の可憐な花も風に揺れている。私はあっちに行ったりこっちに戻ったりして、電柱や草むらの匂いを嗅ぎたいのだけれど、途中でクイッとリードを引っ張られるのが不快で堪らない。そうそう父さんときたら全くそんなことを許してくれなくて、決まったコースを決まった足取りで、ただスタスタ歩くだけなんだ。大好きな道草をしようものなら、いきなりクイッと引き戻されてしまう。父さんこの時、終始無言。

その点母さんはまだスキがある。力も弱いし得意のひとり言をつぶやきながら時々黙認。そして「もうダメなんだってば」なんて言いながらリードを引っ張る。

私も若いころは駅前から本町に出てホテルの角を左折して、本町を北に歩き、七丁目の角を曲がって家に辿り着くという結構な距離を歩いていたのだ。

そう言えばその道すがらに百年程前からの映画館があって、そこを通る時父さんと母さんがちょっと立ち止まって「この建物素敵だね」とか「今　随分力を入れているよね」なんて話すのを、私はナンノコッチャと思って聞いていた。

その映画館は『世界館』という名で生まれ変わり、支配人の寡黙な青年は熱心な支援者と一緒に地道に映画館を育て、今やその存在は全国に知られるようになったんだって。母さんが気に入ってることのひとつは、お客が三人だった時も、開始のブザーが鳴ると客席の後ろで、支配人が「本日はご来館ありがとうございます。ただ今から上映致します。ごゆっくりお楽しみ下さい」と呼びかけてくれる。映画への愛情あふれる手作り感が堪らないんだそうな。

そして何とこの頃は『世界のトナリ』というカフェがすぐ隣に出来て、それがなかなか良い感じらしいのだ。時折母さんはナオコさんを誘っては二人で出掛け、そのカフェに立ち寄るらしい。寛げる雰囲気、お店の人達の細やかな気遣い、メニュー。おいしい上に値段もおさえてあって「良い空間だよね」なんて二人で盛り上がっている。

私は一緒に行ったり、お茶を飲んだりできないのは口惜しいけど、母さんやナオコさんが嬉しいのならマ・イイか！

少しづつそんな場所が高田に増えてくれると良いね。母さん！

ところでウチのナオコさん。去年秋に体調を崩して皆で随分心配したのだけれど、とても元気になったから安心してね。近頃は趣味と称して草取りするナオコさんの傍らで風や鳥と遊んだり、花や草とお喋りしてウロウロしながら、小一時間程外で過ごしたりするんだよ。素敵でしょ。優しくてお茶目なナオコさん　だーい好き！

（以下　次号）